

氏 名	たけ うち り お 竹 内 里 欧
-----	----------------------

(論文内容の要旨)

近代日本における西洋化のプロセスをめぐっては、従来、思想史、政治史、文学史などを中心に多くの研究が行われてきた。また、近年、国際的にも「オクシデンタリズム」という概念に依拠した、「西洋」という表象にかんする研究が注目を集めている。明治初期から日本社会に広く流布した「紳士」という表象をめぐる言説は、西洋化をめぐる葛藤や、近代日本のオクシデンタリズムのあり方を反映している特殊だが明確な「場」としてみることができる。「紳士」においては「真に文明化すること」が問題にされたのであり、「西洋」について表面的知識のみならず、行動様式や人格といった内面的資質を有していることが焦点となったからである。そうした「紳士」をめぐる言説は、近代化・西洋化の過程にある周辺的な国民国家の葛藤や具体的対応を反映しているという点で、従来の「西洋化」にかんする研究のアプローチでは看過されてきた側面を捉える格好のテーマである。故に本論文では、主に明治期から大正期にかけての、「紳士」になるための指南書、礼儀作法書、雑誌記事などを資料に、「紳士」という表象をめぐる言説について分析し、その分析により、近代日本におけるオクシデンタリズムの特徴について明らかにすることを目的とする。

「第1章 序論」では、「オクシデンタリズム」という現象を研究する意義について、E. W. サイードの「オリエンタリズム」と対比しつつ検討する。オリエンタリズムとオクシデンタリズムは、他者の一面的な表象という共通した特徴があるが、オクシデンタリズムは、圧倒的なパワーバランスの中で、相対的に従属的地位にあるものが、ヘゲモニーをにぎっている側に対して、どのような表象を編み出すかという戦略として存在しうる。つまり、オリエンタリズムが多くの場合、統治・管理の目的に適した、より無意識的な戦略であるのと対比すると、オクシデンタリズムは、相対的に不利な国際的状况の中で生き残り、さらに可能であればその状況を再構成することを目指すような、より意識的な戦略とみなすことができよう。そ

れはしばしば、従属的地位にある側からの、交渉と実践の創造的プロセスとなる。

「第2章 なぜ『紳士』か」では、近代日本におけるオクシデンタリズムという現象を検討するにあたって、「紳士」という表象に注目する意義や分析の可能性について、先行研究を検討しつつ述べる。従来、近代日本における「西洋文明」の受容や葛藤について多くの研究が行われてきたが、「西洋化」・「文明化」を象徴する「紳士」という表象に注目した分析はほとんど行われていない。しかし「紳士」という表象についての分析は、近代日本社会において「文明」へのまなざしがいかなるものであったか、「西洋」の戦略的利用のありさまがいかなるものであったかを明らかにする上で有効だと考えられる。本論文は、このような観点から「紳士」という人間像の生成と展開について分析を行う。

「第3章 『紳士』の創出」では、「紳士」という「西洋化」・「文明化」を象徴する理想的人間像の創出と普及の過程について検討する。具体的には、幕末から明治初期の辞書や、社交機関の社史を主な資料に、「紳士」という言葉の誕生、「紳士」のための社交機関の登場、「紳士録」の創刊について整理し検討する。これらの分析から明らかになるのは、gentlemanの訳語として採用された「紳士」が、近代国家を担う新しい男性エリートを表象する語句として活用され定着していくプロセスである。

「第4章 『紳士』の輪郭」では、礼儀作法をめぐる言説を資料に、「西洋」の秩序化とのかかわりにおいて、「紳士」という理想的人間像の位置づけをこころみる。明治初期より、翻訳の作法書が多数刊行され、「西洋文化」の導入が行われた。明治後期頃から大正期にかけては、「交際術・成功術・人心看破術」としての礼儀作法書が多く存在し、そうした作法書においては、「西洋」にかんする知識の程度の差異が重要な役割を演じていた。そして、そうした作法書における理想像として「紳士」という人間類型の創出・定着がみられる。また、「半可通」・「感染」といった言葉の流布からは、「西洋」に対して同化と排除を志向するメカニズムが生成したことが分かる。N. エリアスは、「模倣」と「差異化」の戦略の循環の中に「文明化」のダイナミクスが生成するとしたが、このような状況で生まれた「紳士」と

いう理想像は、「Established」と、「Establishedを目指す Outsider」の権力バランスの緊張関係の中に生まれた過渡的な性格を帯びた人間像とみなすことができる。

「第5章 『紳士』への視線」では、「紳士」の論じられ方に注目し、「真の紳士」と「似非紳士」という二分法にもとづくレトリックが開発されていく様子についてみる。特に注目されるのは、「真の西洋」に、日本社会の依拠すべきものや理想化された過去の日本社会を投影しつつ（＝『真の紳士』の改編）、そこから逸脱していくものを排斥し日本社会内部で差異化を行っていく（＝『似非紳士』の構築）という、表象のポリティクスの輻輳性である。こうした輻輳性は、近代化・西洋化の要請と、「日本」のアイデンティティの連続性の創出・維持という、当時の矛盾を含んだ二つの課題に対応する文化戦略であったことが明らかにされる。

「第6章 結論」では、これまでの分析で得られた知見について、「第1章 序論」の問題意識にかえりつつ、改めて検討する。本論文の第2章、第3章、第4章、第5章では、オクシデンタリズム現象のケーススタディとして、「紳士」の生成、展開、「紳士」にまつわる言説について分析を行った。本章では、特に、第5章において「オリエンタリズムを内包したオクシデンタリズム」と名づけた戦略の「有効性」と「危うさ」について敷衍して検討する。「オリエンタリズムを内包したオクシデンタリズム」とは、「真の紳士」に日本社会の依拠すべき理想の西洋像を投影すると同時に、その「普遍性」を過去の「武士道」などの「日本固有の文明」に探り、そして、その理想像から逸脱するものとして現在の日本社会における「似非紳士」を排斥し差異化を行っていくという戦略である。「武士道」に西洋のジェントルマンシップにつながる「普遍性」を見出し肯定するという視線のあり方は、オリエンタリズムを含んでいるといえるが、通常は「西洋」が「オリент」を支配する様式として現れるオリエンタリズムが、ここでは逆に、まなざされるはずの「オリент」によって行使されているということに注意したい。このような戦略は、一方で西洋を中心とした文明社会への参入を円滑に行うことを促進し、他方で、「日本」のアイデンティティの連続性を創出・維持することを可能にした。しかし、こうした戦略は、以上のような「有効性」とともに、次のような「危うさ」を含んで

いた。「西洋」と「日本」の二項対立のもとに「西洋文明」に匹敵しうる「日本独自の文明」を強調するという、当時の「紳士」にまつわる言説には、「文明」、「普遍」といった「西洋」由来の概念や視点をより深く内面化させつつ、かつ、そうした考え方が「西洋」由来のものであるということを隠蔽し忘れさせるという逆説的なメカニズムが存在する。こうしたメカニズムの不安定さ・脆さは、それが意識化された時、例えば昭和初期の日本主義や日本浪漫派という形で暴発する可能性を含んでいる。そして注意すべきは、こうしたメカニズムの脆さがあらわにされるとき、それに対する反応が、「あるべきはずの伝統に帰る」という形をとりがちであるということである。

以上のように、本論文では、「紳士」という表象をめぐる言説を材料に、近代日本におけるオクシデンタリズムという現象が有した特徴について、また、そうした特徴が可能にしたことと、それが含む危険性とはいかなるものであったかについて検討を行った。

氏 名	たけ うち り お 竹 内 里 欧
-----	----------------------

(論文審査の結果の要旨)

本論文は非西洋社会における「西洋」像の構築を「オクシデンタリズム」ととらえ、明治初期から日本社会に普及し、西洋化・文明化を象徴する人間像として機能した「紳士」という表象を手がかりに、近代日本におけるオクシデンタリズムのありようを分析したものである。

本論文の理論的意義は、「オクシデンタリズム」という概念をめぐる研究史を整理して、非西洋社会が近代化過程において「西洋化」に対してとった重層的戦略を解明する理論的枠組みを提出したことにある。「オクシデンタリズム」という概念は、言うまでもなくエドワード・サイードの「オリエンタリズム」という概念と対比されるものである。サイードによれば「オリエンタリズム」とは「オリエントを支配し再構成し威圧するための西洋の様式」とされる。「オリエンタリズム」という概念は大きな影響力をもったが、さまざまな批判もある。その議論の「出口のなさ」や「閉塞感」もしばしば批判されるが、本論文はその原因をサイードの方法それ自体、すなわちイギリス、アメリカ、フランスなどにおける「西洋の言説」を分析対象とし、オリエントはあくまでもまなざされる側とした方法にあると見る。オリエントの側が抱く「オリエント像」や「西洋像」の構築のプロセス、オリエントの側からの能動的な戦略などを、必然的に見えにくくするからである。

これに対し「オクシデンタリズム」とは、オリエントの側、ないしは「近代化・西洋化の過程にあつて周辺的な地位にある国民国家」において、「西洋」がいかに表象されたかに注目する概念である。しかしオクシデンタリズムをオリエンタリズムと対称的な概念と考えることはできない。後発近代国家における「西洋」表象は、他者に一面的なネガティブな表象を押し付けるものにはならず、尊敬と劣等感、理想化と脅威のいりまじった、両義的で屈折したモデルとなる。そこからさまざまな能動的くふうや戦略が生み出され、ときには「西洋」から押し付けられたオリエント像をオリエントとまなざされる側が利用するという逆説的な状況さえも生じる。

すなわち「オクシデンタリズム」への注目は、言説をその本質的内容ではなく、使用のしかたによって意味が決定される「プラクティス」や戦略として分析するという視角を要請する。オリエンタリズムが多くの場合、統治・管理の目的に適した、より無意識的な戦略であるのと対比すると、オクシデンタリズムは「西洋」がヘゲモニーを握る中、相対的に不利な国際的状况の中で生き残り、さらに可能であればその状況を再構成することをめざすような、より意識的な戦略と考えることができるからである。オクシデンタリズム研究は、「言説の戦略的利用」を分析する。

以上のような理論的整理を行ったうえで、本論文はオクシデンタリズムのケーススタディとして、近代日本社会における「紳士」という人間像の誕生や変容、それにまつわる政治力学を検討していく。分析対象としては、おもに明治期から大正期までの、礼儀作法書、処世本、雑誌記事、新聞記事、社交機関の社史など、多様な資料が用いられる。

「ジェントルマン」とはイギリスにおける狭義の身分概念から派生し、身分・能力・人格の統合された近代人の理想像として世界に広がった人間像だが、日本において「紳士」という訳語が定着するようになるのは1880年代であったことを、本論文はまず明らかにする。それ以前は「君子」という訳語の方が頻繁に使用されたが、中国起源の儒教的世界観を媒介にして「西洋」を理解しようとした思考様式が次第に力を弱めたことがうかがわれる。

「紳士」という表象の特徴は、交詢社に代表される社交倶楽部が実践しようとしたように、近代国家を担う男性エリートや実業家層のめざすべきモデルとして位置づけられ、模範的文明人、「西洋化」や世俗的成功を体現する人物として憧れの対象となる一方で、しばしば揶揄や嘲笑をもって眺められる両義的人物像であることにあった。「外国かぶれ」がしばしば揶揄されたが、それは「真の外国通」に達しない「半可通」という意味合いが強く、すなわち「西洋文化」に対する知識の程度が、「真に文明化されている」かどうかについての「差異化」の指標とされた。「紳士」という表象は日本と西洋とを差異化するのみならず、国内での「地位を固めた者」と「アウトサイダー」との差異化のためにも用いられた。

「紳士」という表象を用いた言説戦略がもっとも鮮やかに表れるのが、「真の紳士」と「似非紳士」をめぐる議論である。この議論はすでに1880年代から見られた。外観および内面の違いが論じられるが、注目されるのは「真の紳士」の意味内容の改編である。1900年代から「真の紳士」と「武士道」や「江戸趣味」を関係づける言説が登場する。日清・日露戦争頃から顕著になった「武士道」ブームの反映がうかがわれる。「武士道」はそれ自体が伝統の再創造であったが、そのような視点の導入により、「真の西洋」は「日本」の内部にありながら普遍性を有するものとして受け容れることが可能になった。本論文ではこの戦略を「オリエンタリズムを内包したオクシデンタリズム」と呼ぶ。「伝統的なるもの」の連続性を担保に「日本」のアイデンティティを創出して国民国家としての体裁を整えることと、迅速に「西洋」の文物や思想を吸収して近代化を行うことという、矛盾を含んだ2つの課題を巧みに処理することを可能にしたのがこの戦略であったと、本論文は主張する。

このように本論文は、オクシデンタリズム言説の戦略的利用に注目することにより、西洋がヘゲモニーを握る世界秩序の中で、近代日本がいかにして社会としての統合を保ちつつ西洋化をなしとげたかを解き明かすための一つの視角を示した。より明確な時代区分や歴史的イベントなどとの関連の追究、「淑女」への注目によるジェンダー視点の導入など、追究が不十分に終わった点もあるが、こうした点は今後の研究で乗り越えられていく課題であり、本論文の価値を損なうものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。2008年6月5日、審査員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。